

大胆な表現を堪能

ヘンデル・フェスティバル・ジャパン(HFJ)によるオラトリオ「サウル」を堪能した。2003年暮れの設立から丸10年、第11回公演は旧約聖書「サムエル記」などに基づいたジュネズ台本による3幕17場82曲からなる大作(正味約3時間)。HFJ主宰者にしてヘンデル研究者としても知られる三澤寿喜の指揮、オリジナル楽器編成(カリヨン^{カリオン}はチェレスター代用)による全曲ノーカット演奏。

コンサート形式のオペラを見るのと同じ思いで、ヘンデルの劇音楽作法の才能の豊かさ、奇抜なアイデア、大胆な音楽表現を楽しむことができた。バロック様式としては異例の大編成オーケストラによる4楽章構成の序曲の壮麗な音楽、曲中に5曲置かれたシンフォニア(第20、31、54、61、70曲)では各2管のオーボエ、トラベルン、トランペット、ファゴット、3管のサクソバットがヘンデルの創意に満ちた技巧的な音楽を鮮や

かに響かせた。また、アリアの伴奏やアッココンパニヤートではハーブやリユート、カリヨン、オルガンなどが人々のさまざまな感情に色彩を与えた。

初代イスラエル王サウル(牧野正人)の最大の敵であるペリシテ人と巨人ゴリアテを打ち破り凱旋した勇者ダヴィデ(中村裕美)に、民衆(HFJ合唱団19人)は歓喜し称賛する。これに嫉妬し、恐怖心まで抱くサウルは娘メラブ(広瀬奈緒)をめとらせようとするが、メラブは卑しい身分のダヴィデを拒絶する。王の嫉妬は怒りに変わり、息子ヨナタン(辻裕久)にダヴィデを殺すを命ずる。ダヴィデの親友であるヨナタンは勇者を弁護し、王を説得。表向きダヴィデを許した王は娘ミカル(野々下由香里)をめとらせる。



堀田力丸撮影

父王への愛とダヴィデへの友情との間で苦悩するヨナタンの心情、相思相愛のミカルとダヴィデの愛の感情、メラブの嫌悪感、サムエルの亡霊と鬼気迫る対話をするサウルの絶望といった、人間感情の危うさと機微を独唱陣は見事に表現した。ギルボア山で戦死したサウルとヨナタンを悼み悲しむ葬送の音楽(第73曲)以降のアリアや合唱の起伏に満ちた表現は聴き応えがあった。独唱陣の好演の中で野々下と辻の歌唱が傑出し、また、合唱の力強い響きが大作のスケールを保証していた。13日、浜離宮朝日ホール。

(音楽評論家・平野昭)